

鼎談

北海道家具を 取りまく問題を語る



左から綿貫，大島，菅又の各氏

語る人

北海道家具工業協同組合連合会

理事長 大島 誠 二氏

北海道立工業試験場 工芸部

部長 菅 又 淳 悦氏

北海道立工業試験場 工芸部

(司会) 研究職員 綿 貫 幸 宏氏

○家具業界の現況

綿貫 お忙しいところ、ありがとうございます。北海道家具といいますが、範囲は非常に広いわけですが、今日は特に木製家具につきまして、いろいろなお話を頂きたいと思います。まず、家具業界の現況ですが、全国的な景気動向などについて、お願いいたします。

大島 全国家具工業連合会（全家工連）の役員会に出席して聞いた話ですが、家具の出荷額は、全国的に需要と供給のバランスが崩れ、3割程度の生産過剰だといわれています。これが価格のダンピングに結びつき、各メーカー共、非常に苦戦しているのが現状です。この原因は、住宅産業の停滞により、家具の需要が減ったことと、購買層にある程度行き渡ったのではないかとされています。対策としては、生産調整以外にないということで、事業転換の促進制度を、家具業種にも指定して欲しいとの要請を、中小企業庁に行っているのが現況です。

菅又 確かにここ数年は、景気そのものはかなり停滞しているようです。昭和37～39年頃の第1次住宅ブーム、また昭和46～48年頃の第2次住宅ブームの結果、家具も急速に生産額を伸ばしました。しかし、最近では第2次ブームから10年経過し、この時買われた家具の買い換え期で、動きが活発になったとの情報もあります。また、生活事情の変化と共に、住宅の増改築が多くなり、現実には、システム家具とかシステムキッチンといわれる需要が、非常に増えているようです。

綿貫 木製家具の出荷額をみますと、昭和58年度は、全国で約1.5兆円、北海道は約600億円で、全国比約4%となっています。これは出荷額ですので、在庫も考慮した実際の生産額は、これを確実に上回ることになります。それで、これを前年度と比較すると、本道は残念ながら約1%減っているわけですが、全国的にはわずかではありますが増えているようです。これについて、どうお考えですか。

大島 本州の増えている原因は、正直いって分

かりませんが、推定するところでは、家電メーカーを初めとする大手企業が、売り上げを伸ばし、中小の不振の分をカバーしているのではないのでしょうか。北海道の場合、家具工業は、100%中小零細企業ですからね。



菅又 時代の流れというか、技術の向上により、大手企業の進出が容易になったのでしょうか。例えば、コンピュータの利用にしても、以前とは比較にならない程進んでおり、職人芸的手加工をロボットに転換し、資本力に物をいわせた家具作りも可能になりました。

○北海道家具の特色

綿貫 それでは次に、北海道家具の特徴などについて、お話を進めて頂きたいと思います。

大島 北海道家具といっても、札幌、小樽、旭川、北見、帯広など各地におけるそれぞれの特徴があり、なかなか一口ではいえないのですが……。しかし総じていえることは、やはり北海道家具は、豊富な広葉樹を利用した、無垢材による重厚



な家具でしょうね。

菅又 北海道家具といえば、道外移出の面からも、旭川を主産地とする、広葉樹無垢材による箱物家具に代表されると思います。私どもでは、昨年東京都内のデパート調査を行いました。中高年齢層では、現在も需要が多いようです。しかし、若年層では、その感覚も異なり、買い易く、使い易く、かつ見栄えのするものなら、いろいろなものが受け入れられており、この面の対応が、北海道では遅れていると思います。

大島 本州メーカーでも、旭川家具の傾向を取り入れた、類似した製品を、数多く製造するようになりました。それで旭川家具は、以前程、伸びなくなっただんですよ。

○木材資源

綿貫 北海道家具は、豊富な広葉樹資源から生まれると思います。木製家具に関する資源問題はいかがでしょうか。

大島 北海道の家具産業は、資源立地型産業といわれ、過去の歴史をみるまでもなく、ナラ、カバ等の広葉樹をふんだんに使った箱物家具は、全国的にも非常に高い水準にあります。これに対して、食堂セットなどの脚物家具は、残念ながら本州メーカーとは競合できません。なぜ脚物家具が弱いかというと、やはり原料が無いためではないのでしょうか。材料は南洋材、張地、スプリング等、皆本州から来るものばかりです。これでは勝てるわけないんですよ。北海道の木材産地としてのメリットは何も無いんです。昔、道材が安かった時代は、皆道材でやったんです。でも高くなって使えなくなったんです。

菅又 北海道家具の特色は、豊富な広葉樹資源が基礎だと思います。しかし最近では、資源の枯渇化に伴い、カラマツを初めとする未利用材も、数多く利用されるようになりました。しかしすべてを単体として使用するのではなく、広葉樹と針葉樹の複合化、低質材と良質材の複合化など、限られた資源に対応する多元的利用が、求められていると思います。

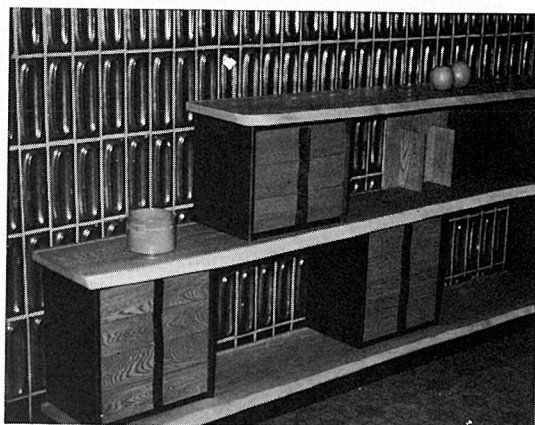
大島 確かに最近、カラマツも数多く使用されていますが、他樹種と比較しても、価格がそんなに安くはないように思いますね。

綿貫 一般家具メーカーにとって、カラマツの資材入手は、そうたやすくはないようです。また、建築材と違って、使用量が少なく、歩留まりが悪いことなどから、価格的にも安いとはいきれない面もあると思います。しかし、カラマツも大径成熟材になると、欠点もかなり緩和され、間伐材とは全く異なった材質感も期待されます。今までは、カラマツというと、間伐小径木を対象とした低級材のイメージがとれなかったわけですが、特に家具への応用として考えますと、むしろ成熟材(良質材)を使用した高級感覚をイメージした製品開発も必要なのではないでしょうか。

大島 私どもも、木材の資源問題については、よく話題になります。御承知のように、全国的にみますと、木製家具の大半は、外材(南洋材)から作られているのが現状です。すなわち、木材の輸入が止まったら、木製家具も終わりです。世界的にも砂漠化が進み、資源の減少はますます続くと思います。この点からも、道産広葉樹は、本当に貴重品です。その意味で、広葉樹の植林技術なども、ぜひ検討して頂きたい問題です。それから、一つ残念なことは、私どもと木材業界との接触が意外と無いんですよ。以前にも、「広葉樹を売りたい」という時に、木材業界では、私どもに何の連絡もしてくれませんでした。このへんも、何とかしなくてはと感じているところです。

菅又 この種の問題では、私どもが中に入っ
て、うまくやらねばいけないんでしょがね。ここ数年は、林産試験場との共同研究を初め、多くの接触を図るよう努力していますので、おいおい改善されるのではないのでしょうか。

大島 まあ、北海道家具は、何といても広葉樹ですよ。広葉樹資源の効果的活用だと思います。



。消費者ニーズへの対応

綿貫 家具開発は、時代と共に変化するものと思います。その時代に求められる、いわゆる消費者ニーズへの対応が、北海道はとかく遅れがちだといわれますが……。

菅又 東京方面の評価では、北海道家具は、その主張に一貫性が欠けるといわれます。すなわち、産地による違いが大き過ぎるため、セールスポイントを限定できないというんですね。最近の傾向では、現代感覚とマッチした、狭い住空間におけるシンプルで、機能性に富んだ家具が要望されているようです。

大島 東京での消費動向は、確かにそうだと思います。しかし、都会向きのカジュアル家具では、やはり北海道家具は、本州メーカーに負けると思います。何と云っても、無垢材による重量感のある家具、これが今までの北海道家具の特色だったんです。ですから、この特色を生かし、なおかつ、都会的センスを加味した家具作り、これが今後の進む方向だと思います。

綿貫 最近、消費者ニーズを追いかけるあまり、目先の問題にばかり振り回され、肝心の製品開発技術をおろそかにする傾向もみられるようですが。

大島 私も全く同感です。消費者ニーズを追いかけることに神経を使い過ぎ、今日的な物しか作れないようでは、本当に困ります。昔、北海道木工展があり、これは技術そのものの展示会だったんですが、世の中が段々せち辛くなり、飯のタネ



にならないものはいらない、ということで中止してしまいました。私はやはり残すべきだと思っていますね。すぐ売れる物でなければいけないということで、展示会が商品販売見本市にすり替わってしまいました。これじゃ、世の中の進歩に対応しきれず、とり残されてしまいます。今売れなくても、数年後を見越した製品開発が重要だと考えています。

菅又 私も全く同じ考えです。その点、私ども公設研究機関は、市場性の問題をある程度隔離して研究できるわけで、5年後、10年後を目標とした研究や製品開発を心掛けております。加工機械のNC化、新接合技術の開発、カラマツを主とする未利用材の製品化など、すべてこの観点から研究を進め、最近は一定の評価も得られております。ただし、企業が単独で行うとなると、非常に難しいと思いますので、ぜひ私どもに相談して頂きたいと思いますね。

。流通問題

綿貫 道内の家具業界は、問屋依存型といわれ、業界の発展には問屋の力が非常に大きかったと聞いております。最近、大手問屋の倒産が相次ぎ、流通機構に変化があるようですが……。

大島 私は問屋護謄論だったんです。私ども業界の流通は、案外明確で、メーカー、問屋、小売業しかなく、1次問屋、2次問屋という複雑さはありません。特に北海道は、地域が広く、輸送コ

ストも高いため、問屋に頼んだ方が有利だったんです。しかし、最近道内問屋の倒産が相次いでありましたが、その原因は、小売業が伸びたためです。昔の小売業は、資本力が無いため、問屋は、メーカーと小売業の間で、金融面の面倒もみていたのです。しかし最近の小売業は、大型店舗、大量仕入れなどにより、問屋に依存する心要が無くなってしまったのです。

綿貫 こうした流れの中で、メーカーとしてのお考えはいかがでしょう。

大島 これはもう流通革命ですから、仕方のないことだと思います。ただし、問屋のもつ良い点として、ある程度の価格調整が可能だったんです。現在のような、ダンピング競争は招かなかったと思いますね。さらに私どもメーカーも、このような流通変化に対応するよう、製造だけでなく、販売にも力を入れなくてはならなくなりました。販売部門を分離できると良いのですが、中小企業では、なかなかできませんよ。それでメーカーも、販売にばかり頭をつけて、肝心の製品開発がおろそかになっているんです。これは困ったことです。

菅又 メーカーとしては、それだけ厳しい時代に入ったということですね。今後、より一層の自社努力が必要だと思います。

。デザイン

綿貫 次に、家具の技術問題に、お話を移して頂きたいと思います。まずデザイン問題からお願いいたします。

大島 北海道家具が、本州より一番遅れているのは、塗装、色調を含めたデザインだと思います。大体、デザイナーを確保しているメーカーは、ほんのわずかで、ほとんどが本州のデザイナーに依存しています。やはり距離的にみても、不利といわざるをえません。

菅又 そうですね。デザイナーといっても数的には限られていますし、本州のメーカーと競合するのは、面白味がありません。地域性を加味するのは、ほとんど無理でしょう。やはり、自社に



おける人材育成が重要だと思います。

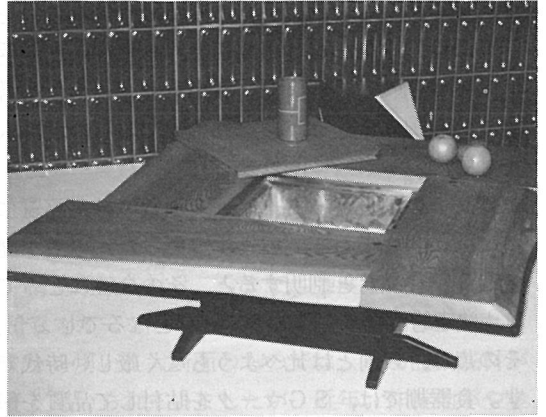
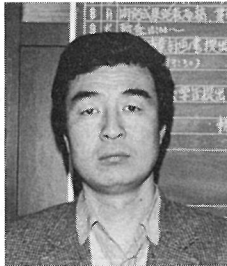
大島 その意味では、デザイナーの社会的地位を上げなければいけないでしょう。北海道の土壌に育ったデザイナーが出なければ、北海道家具の特色は出せないと思います。

菅又 家具を作るに当たり、どうも家具そのものしか考えていない傾向がありますね。例えば、回りの生活用具との調和に対する配慮が足りないようです。しかし、最近の若い人達の間では、家具デザインをするには、他業種のデザインも勉強しなければ駄目だ、との感覚から、いろいろ努力しているとの情報も入ってきております。

綿貫 デザインの活性化を図るため、デザインコンペを検討されているようですが……。

大島 今回、家具連合会で取り上げる予定のデザインコンペ（仮称）

は、北海道の特色ある家具作りをテーマに、道内在住者一般から、広くデザインを募集し、デザイナーの発掘、育成を意図したものです。これは、プロとアマの2部門からなり、第1次図面審査をパスしたものについて、製品化を行い、来年2月の札幌家具展の会場で、最終審査をして、入賞者を決めたいと思っております。そして、希望するメーカーがあれば、デザイン権を譲渡する予定です。少しでも、デザインの活性化につながればと思っています。



社のように、そのラインは、以前と違って、決して少品種大量生産型ではありません。細部は、製品の需要に応じて、その都度転換可能な、多品種少量生産型で、かなりの柔軟性をもっています。道内メーカーも参考になるのではないのでしょうか。

大島 私どもも、今後の方向は、そうなるだろうと考えています。ただし、中小零細企業として、問題はやはり資本力です。なかなか、本州大手メーカーのようにはいきません。ではどうするか。やはり、我々のもっている技術を生かし、大手メーカーにまねのできない製品化をめざすことだと思います。そのために、我々企業は、もっともっと力をつけなければならないと思います。何せ、今の状態でしたら、良い人材も満足に集まりませんよ。

○品質向上

綿貫 最近の傾向として、品質向上が重要視され、例えば、食器棚にSGマークを貼付し、その品質を保証するなど、各種の制度が導入されていますが、道内企業の対応はいかがでしょうか。

大島 確かに、私どもの木製家具も、ひところは技術的後進性といえますが、本州と比較すると、品質的にもかなり遅れた点が多かったですね。しかし、最近のいわゆる高級家具では、この種のトラブルは少なくなったと思います。例えば、食器棚にしても、ホルマリンの問題など、真剣に取り組みました。ただし、ここで問題が生じたこと

は、ホルマリン規制に合格するため、無臭合板を使うわけですが、これが高価で、またなかなか手に入らないので。資材コストが、製品価格に影響するのも困りましたが、無臭合板そのものが、入手し難いのも本当に困りました。

菅又 以前と違って、最近の消費者は、品質に特に強い関心をもっています。いったん事故が発生し、不良品だと判明すると、その会社にとっては、決定的なマイナス・イメージとなるでしょう。その点は、以前とは比べようもなく厳しい時代です。食器棚では、SGマークを貼付して品質を保証していますが、このマークの認定工場は、道内ではまだ4社しかありません。全国的レベルから見ると、非常に関心が薄いようです。

綿貫 食器棚のSGマークでは、私が北海道の試験面での窓口になっていますが、全国と比べると、その関心は低いようです。これは、工場認定や検査申請書など、事務手続きが面倒なこともあるのですが、やはり肝心なのは、このマーク自体が、道内ではまだ一般に浸透していないためでしょうね。それで最近では、SGマークの所管先である製品安全協会も、製造側だけでなく、小売業や一般社会へのPRにも力を入れ、各種の広報活動を行っています。何と云っても、これからは量より質が求められる時代ですので、この種の制度は、積極的に取り入れて欲しいと考えています。

○今後の方向

綿貫 それでは最後に、北海道家具の今後についてお話し下さい。

大島 私はやはり、ナラ、カバを中心とする広葉樹を生かした家具づくりだと思います。今までは無垢材を使った重厚な感じの家具が、北海道家具の主流でした。消費者ニーズの動向では、必ずしも、これが今後の方向とはいえないかも知れません。ですから、製品開発の方向は、その時々で変更すると思いますが、使用材の基本は、広葉樹だと思います。豊富な広葉樹資源を活用し、その上で、各種のデザイン開発を行うということでしょう。北海道の家具メーカーでありながら、北海道の資源を活用しないのでは、本末転倒だと思います。

菅又 私も同感です。ただ北海道には、広葉樹だけでなく、カラマツなどの針葉樹資源も豊富です。また、ナラ、カバ以外の広葉樹でも、新しい技術開発で家具に応用できる材料もたくさんあります。やはり、これらの資源をいかに活用するかということでしょうね。製品開発の方向性では、中小企業の体質に適合した製品づくりを指向すべきだと考えています。つまり、大手企業にまねのできない、少量ではあっても、確実に売れる商品を開発するということです。そのためには、各メーカーに、より一層の努力が要求されると思いますが、私どもも、精一杯協力いたしますので、がんばって頂きたいと思います。

綿貫 本日はどうもありがとうございました。やはり北海道家具は、北海道の木材資源があってこそ、その特長が生かされると思います。今後一層の家具業界の発展を祈念して、終わりにしたいと思います。

(文責 綿貫)